

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：13903

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770184

研究課題名(和文)小節と二次述語における叙述構造に関する共時的・通時の研究

研究課題名(英文) A Synchronic and Diachronic Study of Predication in Small Clauses and Secondary Predicates

研究代表者

横越 梓 (Yokogoshi, Azusa)

名古屋工業大学・工学(系)研究科(研究院)・准教授

研究者番号：80508391

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：現代英語における小節と二次述語の統語的性質を説明し、それが歴史的にどのような変化を辿ったのかを明らかにすることで、これまで行ってきた小節に対する分析との平行性を探った。現代英語において、小節や二次述語は機能範疇Prによって導かれる構造であり、Prはフェイズであると主張した。歴史的データの観察から、Prは14世紀に現れたことが示され、現代英語における当該構文の統語構造が確立するに至るまで、14世紀から18世紀まで語彙範疇から機能範疇へと構造の変化があったことが示された。

研究成果の概要(英文)：This study is dedicated to the structure of small clauses and secondary predicates in English. It is argued that small clauses in present-day English is headed by the functional category Pr, and the syntactic structure headed by Pr is a phase. Evidence for the presence of Pr in small clauses and secondary predicates began to be attested in the fourteenth century. The investigation based on historical corpora has revealed that there was a change from the structure headed by a lexical category to the structure headed by Pr, which is shown to have been completed during the eighteenth century, and the structure of small clauses and secondary predicates has changed.

研究分野：英語学

キーワード：小節 叙述

1. 研究開始当初の背景

いわゆる小節の構造とそれが伴う叙述関係については、独立の叙述理論に基づいて主語と述語がリンクされるという Williams (1980) 等の採る見解に対して、Stowell (1981) 以来、叙述関係は特定の構造形の下で確立され、小節の主語と述語は単一の構成素を成すという見解が主流となってきている。Stowell (1981) 本来の提案では、叙述関係は述語となる語彙範疇自体の指定部位置を主語となる名詞句が占めることによって確立されるとの分析がなされていたが、その後の研究の進展により、小節の主語はむしろ述語となる句範疇を補部にとる機能範疇の指定部を占めるとする見解が有力となってきている。このことは、Stowell において範疇横断的に見た指定部と言う X' 的な構造的位置に帰せられていた主語という文法機能、あるいはそれ述語との叙述関係が、機能範疇の仲介によって達成される、つまり特定の構造形を形成する役割を含めた機能範疇自体の特性に帰せられるものと見做されることを意味している。

このような見解を更に推し進めた分析の 1 つが Bowers (1993) に見る PrP 分析である。彼は、全ての叙述関係は主語をその指定部、述語をその補部に選択する機能範疇 Pr(edication) の存在によって確立されると主張し、叙述の確立のみを主たる機能とする専用の範疇を仮定した点で、時制や相等本来的には別個の意味機能を有する機能範疇により、付随的に叙述関係の仲介がなされるとする分析とは一線を画するものと言える。この見解の下では、叙述関係を伴うと見做される様々な構文の共通性は、正に Pr という具体的な範疇の存在に集約されることとなる。小節研究の見地からすると、このような叙述理論はそこで得られた様々な経験的・理論的結論から、他の叙述が関与する構文に対して直接的な帰結を導くことを許すだけではなく、逆に他の構文で得られた成果も小節を分析する上での証拠や有益な示唆として参照できることになる。

申請者はこれまで小節と呼ばれる構文に対し、最新のミニマリスト理論に基づいて通時的・共時的な研究を行い、その構造が位相を形成すると主張し統語構造を提案している。さらに歴史的なデータの検証から、小節の構造は語彙範疇から機能範疇へと歴史的に変化したと提案している。その提案がより広い叙述の概念に利用可能なものかどうか検証すべく、近年は二次述語の統語的・意味的特性を観察しながらその統語構造の分析を続けている。

2. 研究の目的

本研究の具体的な目的は、以下のとおりである。

[A] 最新のミニマリスト・プログラムの理論を生物学的基盤に基づいて研究する。

[B] 言語理論で扱うべき経験的基盤として、英語における二次述語の統語的・意味的振る舞いを観察し、経験的データを充実させる。通時的なデータと共時的なデータの両方を観察し、Yokogoshi (2007) 以降で提案している「叙述関係は範疇 Pr の存在に集約される」を前提としながらその議論が拡張可能かどうかの検証に重点を置く。

[C] さらに、位相理論の下で小節・二次述語の性質を捉え、本研究の理論への貢献の可能性を探る。

[D] 以上の研究に関わる成果を積極的に国内外の学会で発表し、学術誌へ投稿して論文の掲載や研究書・論文集として刊行する。過去の文献データを整理するとともに、調査した記述データや実験データを集積する。

[B] については、これまでの研究で蓄積されている現代英語のデータと歴史的なデータをさらに充実させるべく調査や実験を行うこととする。

3. 研究の方法

現代英語における小節と二次述語の統語的性質を説明し、さらにそれが歴史的にどのような変化を辿ったのかを明らかにすることで、申請者がこれまで行ってきた小節に対する分析との平行性を探る。主たる目的は当該構文の統語構造を明らかにすることであるが、叙述関係を含む構文であることから、意味論的な考察も継続する。

(1) 調査対象となる具体的な構文である小節・二次述語の言語データを収集する。これまで収集してきたデータに加え、小節・二次述語を扱っている未読の論文(ミニマリスト理論に基づいているか否かに関わらず、また統語論的な観点からのアプローチ以外で分析している論文も含める)、英字新聞や雑誌など、研究書以外の書籍、既存のコーパス(The Bank of English)などを利用し、新たなデータを収集する。収集したデータからは得られないものについては、例文を作成し、英語の母語話者による判断を基準に、より精緻なデータベースの作成を試みる。そのため語法や文法に関するアンケート調査を行うこととする。

(2) 歴史的なコーパス(The Oxford English Dictionary (OED), 2nd ed. on CD-ROM、The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition (PPCME2)、The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)、The Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE)、The Corpus of Historical American English (COHA) など) を用いて歴史的データを調査し、小節・二次述語に関するデータを収集する。そして検証した歴史的データから、二次述語が現代英語に至るまでどのような特性を持っていたのかを分析する。歴史的データの調査結果から、二次述語の構造に対する統

語的分析を、小節の構造に対する統語的分析と比較検証する。

従来、歴史的データに関して理論的に説明を試みる研究はあまり多くはないが、まず、現代英語における当該構文の統語的分析を提示した上で歴史的なデータを遡り、Yokogoshi (2007)で主張しているように「小節の構造は語彙範疇から機能範疇へと歴史的に変化した」という分析に対して、二次述語のような、叙述が関与するより広い範囲の構文について検証を試み、叙述関係を表す要素の振る舞いがどのように関わるのかを検証する。

4. 研究成果

現代英語における小節の構造についての分析と、二次述語の構造についての分析から、両構文の統語的・意味的特性の共通点・相違点を明らかにした。まず、現代英語における小節と二次述語の構造を提示した。現代英語において、小節や二次述語の統語構造は機能範疇 Pr を主要部とする範疇であると提案した。この証拠としては、虚辞 it の生起や遊離数量詞の分布などから得られ、叙述関係を導く機能範疇が存在することは明らかである。さらに、Pr は位相であるとする理論的証拠を提示し、最新のミニマリスト理論に基づいて検証し理論的貢献を提示した。

二次述語において、結果述語はそれが叙述する目的語と叙述関係にある。Williams (1980)や Rothstein (1983)やそれ以降の研究で主張されているように、叙述関係が成り立つためには述語とそれが叙述する名詞句の間に局所的な関係がなければならないと仮定すると、結果述語と目的語は局所的な位置関係にななければならない。数量詞遊離に関する経験的事実からも、小節と結果述語は同じ振る舞いを示している。しかし意味的な側面からは、小節は原因・結果という関係を表さない点で結果述語とは異なる構文であり、さらに結果述語の生起は随意的であることなどからも、両構文の構造は異なることを示した。

他動詞タイプの結果述語については、数量詞遊離の経験的事実からも、小節と同じく主述関係を導く Pr が投射していると仮定し、その中で動詞と目的語が局所的な関係を確立していると考え、その統語構造を提示した。結果述語の統語構造では、動詞は V から Pr へ移動すると仮定する。目的語は動詞により意味役割を与えられると考えられ、したがって主述関係が成り立つための局所的な関係を確立する統語構造を提案した。目的語は述語 XP 内に基底生成された後、VP 指定部へ移動する。これは数量詞遊離の経験的事実からも示されるように、目的語が数量詞を元位置に残し移動していることは明らかである。

自動詞タイプの結果述語については、目的語の位置付けについて他動詞タイプの結果

述語と異なることが指摘されている。目的語自体は動詞ではなく結果述語によって認可されるため、動詞の項ではなく結果述語の項であると考えられる。本研究で提案された構造では、目的語は XP 内に基底生成されるので、そこで結果述語による認可を受けると説明できる。

現代英語における小節や二次述語の統語的・意味的特性を明らかにし、その統語構造を提示した上で、歴史的なコーパスを用い、これらの構文が辿った歴史的な経緯を調査した。そして検証した歴史的データから、二次述語が現代英語に至るまでどのような特性を持っていたのかを分析した。さらに歴史的データの調査結果から、二次述語の構造に対する統語的分析を、小節の構造に対する統語的分析と比較検証し、それぞれの統語構造を提案した。

歴史的コーパスの調査の結果、叙述関係を導く機能範疇 Pr は 14 世紀に出現し、その後 18 世紀に至るまでにその位置づけを確立したと考えられる。したがって、当該構文の統語構造は歴史的に変化したことが明らかとなった。つまり、14 世紀に Pr が出現するまでの統語構造は、語彙範疇のみから成る構造であり、Pr が出現して以降は機能範疇の構造を持つようになるが、その位置付けが確立したのは 18 世紀になってからであり、14 世紀から 18 世紀までは統語構造の過渡期として 2 つの構造が存在していたことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

Azusa Yokogoshi, Predication Phrase and Phasehood, *New Directions*, 査読無、2016, p.35-43.

横越 梓, 小節分析を用いた連語の構造についての一考察, *New Directions*, 査読無、2015, p.17-32.

横越 梓, 英語の結果述語の統語構造について, *New Directions*, 査読無、2014, p.45-50.

〔学会発表〕(計 1 件)

横越 梓, 「英語の史的発達にみる小節構造の変化」名古屋大学英文学会第 54 回大会シンポジウム『統語構造の可変性—通時的視点から』, 2015.4, 名古屋大学

〔図書〕(計 2 件)

横越 梓, 分担執筆「英語の史的発達にみる小節構造の変化について」『*文法変化と言語理論*』2016.

横越 梓, 項目執筆、『*英語学・言語学用語辞典*』, 開拓社、2015.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

横越梓 (Yokogoshi, Azusa)
名古屋工業大学・大学院工学科・准教授
研究者番号：80508391

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：